

# 変わる日本の「暮らし」と「まち」

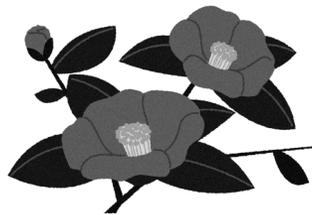
子供たちの「まち育て」の象徴となる  
防災観光交流センターが完成

岩手・大船渡市大船渡駅周辺地区  
土地区画整理事業・  
津波復興拠点整備事業  
(2012年・平成24年)

阿部民子

text by Tamiko Aobe

Illustration: Shigeyuki Sakata



柔らかな日差しに春の兆しを感じる3月6日。岩手県のJ R大船渡駅前広場に、赤い体育帽子をかぶった24人の小学生が、先生に引率され、浮き浮きした足取りで現れた。この日は、大船渡市立大船渡小学校3年生が1年間取り組んできた「大船渡博士になろう」という授業の一環。新しく生まれ変わるつつあるまちの見学を通し、故郷への理解や愛着を深めようというものだ。

到着したのは、完成間近の大船渡市防災観光交流センターだ。子供たちは、1階の観光交流スペースや2階の和室や授乳室、多目的室、屋上を順番に見学。スタジオでは中と外、2班に分かれて中から大きな声を出し、外で聞こえるかどうかを実験。「本当に聞こえなかった?」「中で跳ねてもひびかないんだね!」と外にいた子に確かめる様子もほほえましい。見学の合間には、大船渡市や施工者の東急建設と明和土木の担当者によるミニ講義も行われた。



安心・安全に大きくつながる防災観光交流センターの存在は大きい

愛情をもって、この建物を作ってきました。でも、僕の『まちづくり』のお仕事はここまで。これからの『まち育て』の主役はみなさんです。ここで遊んだり勉強したりして、このまちをもっとイキイキさせてほしい。そしてこのまちをずっと愛してもらいたい」とあいさつ。子供たちからは「高校から大船渡を離れるかもしれないけど、僕たちの力で『まち育て』をずっとやっていけたらいいなと思います」と感想が述べられた。

た。2016年には全ての災害公営住宅の引き渡しを完了。土地区画整理事業による基盤整備は引き続き行われるが、当センターがURの大船渡市における建物整備の最後の業務となる。

でも広げてくれたら」と話す。屋外の設計を担当したUR岩手震災復興支援本部の山本洋之も「大船渡駅前というまちの中心エリアで建設される最後の建物なので、周辺にある駅や商業施設などと溶け込み、まちとしての一体感を出せるように配慮しました。ここまでこられて、いまはホッとしています」と笑顔を見せる。

ワイン醸造所を見学。「柱に大船渡の木を使っていて、そういうところでも大船渡を見ているんだなと思いました」(川原絵理奈ちゃん)

「センターが完成したら、2階にある机がある部屋で勉強してみたい」(木下龍葵くん)

「大人になったら、皆さんみたいに、大船渡のまちをつくる仕事をしたい」(関原なみちゃん)

など、感想を発表した。

「この学習での一番の願いは、故郷を知って、故郷を愛する大人になってほしいということです。いずれこのまちを出ていっても、心の中に帰る場所、自慢できる故郷があれば、どこに行っても生きていける。自分をいつでも見つけていってくれる故郷があることを心に持つ大人になってほしい」と担任の薄衣浩子教諭。新しく蘇る故郷に誕生するセンターと広場で、元気な子供たちの声が聞こえる日が待ち遠しい。

## 防災と居間の機能を併合

忌まわしい東日本大震災から7年。大船渡市では、山側を安全な住宅地に、海側を商業業務地にする、新たなまちづくりを進めてきた。URは市と協力協定を結び、土地区画整理事業と大船渡駅前を中心とした津波復興拠点整備事業、災害公営住宅の整備に尽力。この防災観光交流センターの整備について5年前から携わってきた

「ここは復興の象徴になるのもちろんのこと、普段は市民の方々に居間のように使っていただけ。よう、色や素材などで温かみや柔らかさを表現しました。大船渡名産のかき殻を使った漆喰や気仙杉など地元の素材も取り入れていきます」と梅本。

屋外の造園を担当したUR岩手復興住宅工事事務所の押山国男は「人のつながりの中心になるよう、外のベンチやアプローチなどは、丸やだ円をモチーフにデザインしました。暖かくなったら、外のベンチで皆が輪になってお弁当

センターの見学を終えた子供たちは、近くに建設中の椿茶工場や

## 故郷を知り、愛する大人に

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社